

# 農業技術情報

2019年4月19日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128  
 JA幕別町 0155-54-4118  
 JAさつない 56-2131  
 JA帯広大正 64-4591  
 日甜幕別原料事務所 54-2756  
 幕別町農林課 54-6605

## 秋まき小麦

### (1) 2019年産きたほなみの生育状況

平年より大幅に早い起生期を迎えましたが、その後おおむね順調に経過しました。4/19現在の茎数は過去3ヵ年平均値（2016～2018年）と比較し大幅に多く（表1）、幼穂形成期も平年（5/5）より10日前後早まる見込みです。本年は雪腐病は少ない一方で凍上害が散見されました。凍上害や生育不良で早期に分肥した場合、今後の施肥についてはJAまたは普及センターにご相談ください。

また、ローラー鎮圧を行う予定の方は早急に（幼穂が形成される前）実施しましょう。

表1 きたほなみの生育（4月19日 幕別町14ほ場）

	2019年			平均値(2016～2018年 幼穂形成期調査)
	平均	最大	最少	
茎数(本/㎡)	1,903	2,728	1,100	1,477
草丈(cm)	13.4	16.0	10.6	14.2

表2 きたほなみの生育期節（幕別町）

生育期節	2019年	平年値	早晩
起生期	3月23日	4月5日	13日早い

\*起生期：春季に至り40～50%が生長を開始し、葉の起立し始めた日

### (2) 窒素分肥

幼穂形成期の前後（本年4月末～5月初）の窒素分肥は、一穂粒数の増加へ高い効果があります。適正な分肥により収量の確保を図りましょう。ただし、起生期頃（4月上旬～中旬）に施用した窒素量とあわせて8kg/10aを超えないよう分肥量を加減します（表3）。

また、過繁茂で倒伏が懸念される場合は成長調整剤の使用も検討しましょう。「サイコセルPRO」は表4の通り、秋まき小麦では「幼穂形成期」1回、「出穂前20～10日」1回の計2回までの使用が可能になりました。

表3 きたほなみの幼穂形成期窒素分肥量の目安

小麦ほ場の状態（4月下旬時点）		窒素施肥量	備考
茎数 2,000本/㎡以上	平年並の葉色	分肥を控える	起生期～幼穂形成期の合計分肥窒素量は8kg/10a以内とする
	黄化が激しい場合	2kg/10a程度	
茎数 2,000本/㎡未満	平年並の葉色	2～4kg/10a	
	黄化が激しい場合	4～6kg/10a	

表4 茎稈伸長抑制剤の使用例（秋まき小麦）

薬剤名	使用時期	使用量 (m <sup>2</sup> /10a)	使用回数	備考
サイコセルPRO	幼穂形成期	150～200	1	・散布時期が遅れると効果が劣る。 ・高温時は薬害が発生する恐れがあるため夕方に散布する
	出穂前20～10日 (草丈40～60cm)	200～300	1	